

学校関係者評価

I 通信制高校のあり方について

- 1 多様なメンバーで共通意識を持つことは大変難しい。年齢による意識の違いも大きい。うまく連携が取れるといろいろな効果が期待できる。
- 2 保護者との組織的な連携システムが欲しい。
- 3 学歴だけが重要ではなく、また、ネットがすべてではない。人と人の直接的な接触による、連帯意識を育むことも大切だ。
- 4 通信制高校においては、全日制高校を補完し、全日制で適応し難かった生徒を救済していくという面もある。

II 不登校や特別支援を要する生徒への取り組みについて

- 1 中学校では、不登校の生徒が「トライやるウィーク」の取り組みには参加する者が多いと聞けるが、高校では行事に参加する者が非常に少ない。
- 2 「トライやるウィーク」にはこどもは、「やらねばならない」というプレッシャーを感じながら無理をして参加する生徒も多く、そのリバウンドでひどくなるケースもある。個々の問題として考えていく必要がある。
- 3 特別な教育的支援を必要とする生徒への対応は、登校している生徒に対する指導に限られているものの、他校と比較して、青雲の取り組みは進んでいる。

III e-learning や基礎学力の定着を目指した学校設定科目について

- 1 小・中学校で基礎・基本の理解・習得ができていないままの生徒に対して、基礎・基本を教育に取り入れることは重要である。特に、現代のようなネット社会においてはキーボード入力のためのローマ字理解の重要性は増している。
- 2 人とのコミュニケーションを図るのが苦手な人にとって、インターネットは有効な手段である。そのためには基礎的なことができることは重要である。
- 3 不登校のこどもの中でも、個々の能力に差がある。また、インターネットにも功罪両面がある。
- 4 特別な教育的支援を必要とする生徒にとって、勉強だけでなく、人づきあいのやり方が理解できたなどの、今までできなかったことができるようになることの効果は大きい。その意味でも定時制・通信制高校に対する社会の期待は大きい。